

新型コロナで政治が見えた

検察庁法改正案が今国会成立見送りに

昨日、三権分立を壊す検察庁法改正案について、政府が今国会の成立を見送るというニュースが舞い込んできた。オー！ヤッターという気持ちである。

政府や安倍首相は、何が何でも数の暴力で、押し通そうとしていたから、なおさらだ。

政府を追い込んだのは、野党の一致した徹底抗戦がある。

新型コロナ感染拡大に対する政府の対応のまずさに、国民は肌で感じているところに、「検察庁法改正案」を無理やり押し通すのは何事かと思ったことも一因ではないか。

そして、30代の無名の女性がツイッターで「検察庁法改正案に抗議します」とつぶやいて、そのつぶやきが、市民や著名人、芸能人にも広がり、600万にも広がったことが大きな影響といえる。

その内容は、「右も左も関係ありません。犯罪が正しく裁かれない国で生きていたくありません。この法律が通ったら『正義は勝つ』なんてセリフは過去のものとなり、刑事ドラマも法廷ドラマも成立しません。絶対に通さないください。」と素直な分かりやすいものである。この内容が爆発的な拡散を広げたと思う。

●小さな当たり前のつぶやきが大きな力に

また、新型コロナの感染拡大で、ほとんどの国民は、外出せず自宅での「自粛」を余儀なくされた。働きに出ている人たちが普段見ることのない国会中継が朝から行われていた。最初にツイートした女性も、初めて国会中継を見て、安倍首相の答弁などを聞き、おかしいと思い、誰かが反対してくれるのかなと思ったが、思い切って自分でもツイートしたそう。その踏ん切りが、世論を作ったと思う。

私も、遅ればせながら、5月13日にツイッターを初めて登録し、つぶやいた。

さらに、5月15日には、元検事総長の松尾邦弘氏ら検察OBが「検察庁法改正案」に反対する意見書を森法務大臣に提出した。これは、異例中の異例だそう。これも大きな影響を与えたのではないか。安倍首相が黒川氏の定年延長を法解釈の変更だけで行ったと国会答弁したことについて、「ルイ14世の『朕(ちん)は国家である』との言葉を彷彿とさせる」、「三権分立主義の否定にもつながりかねない」と痛烈に批判している。

検察OBの意見書は最後に「与党野党の境界を超えて多くの国会議員と法曹人、そして心ある国民すべてがこの検察庁法改正案に断固反対の声を上げてこれを阻止する行動に出ることを期待してやまない」と呼びかけている。

反対世論の大きさを前に自民党内でも矛盾が広がり、今国会での成立を見送る判断をせざるを得なくなったと思う。

私たちは、労働運動などで声を挙げて、広げて、要求実現をめざすことをずっとやってきているが、「声を広げる」ことの重要性を改めて思い知らされる。

それと共に、SNSなどで「声を広げる」ことの工夫も必要であること、政治に普段関心を持たない人、保守的な考えの人、普通の人々を巻き込むことが重要である。

ただ、政府は、検察庁法改正案を断念したわけではないので、闘いは続く。きょう午後6時から、第二衆議院議員会館前を中心に、検察法改悪反対スタンディング。息の根止めるためみんなで行こう。

(千代田区労協議長・小林秀治)

*千代田区労協通信バックナンバー／http://www.chyda-kr.org/kuroukyou_news2020.htm

※皆さんからの投稿、感想・ご意見などお待ちしております。